

直木賞作家が、悩める人々に語りかける小説

つくっていくのは、期待しています

「女房がどこかで買ってき
た」というTシャツから、タ
イツ、スニーカー、肩にかけ
たバッグ、さらに髪まで、ピ
ンク、黄、紫、緑で淡くやさ
しく彩られた装いで、約束の
場所に登場した著者。

「今の時代の特徴を
ひと言で言ったら、
閉塞感でしょう。ど
つちを向いても壁が
ある。希望を持ちに
くくなっていますよ
ね。」

今の日本はどうに

か食べることはできるし、生
活自体はなんとかできていま
す。でも40代くらいの人にと
つて、将来リタイアしたとき
に悠々自適の暮らしができる
かという点、その保証はあり
ません。だから近未来の展望
が持てず、自分も見えない。従
って前向きになることもでき
ないんじゃないでしょうか」
やさしい口調で、今、とい
う時代を語る彼は、将来への
あきらめムードが漂い、希望
を持つことを忘れていて、と
指摘する。

「電車に乗っていて、実際に
よく見かける光景があるんで
すが、中年の男性が突然電車
を降りて、ホームでハアハア
と荒い息を吐いている。一種
のパニック症候群だと思うん
ですが、これも閉塞感もたら
す近年の傾向でしょう」
家族の健康を預かる主婦と
しては、通勤途中で夫や子供
が、そんな発作を起こしてい
るかもしれないと思うと、い
たたまれない。だがそれが、
40、50代の置かれた状況なの
かもしれない。

本書は、書き下ろしの「人
生が元気になる小説」。26才
にして人生に行き詰まり、悩
んでいる主人公は、謎の老人
・カゲーキフと出会う。この
老人は、主人公にしか見えな
い。老人は61のヒントを与え、
このヒントが大きな文字の見

出しとなって目に飛び込むと
いう読みやすい仕掛け。小説
というより、問題解決に導い
ていくというビジネス書のよ
うな構成だ。

《失敗はただの局地戦せよ
部分が炎症しただけだから
それで自分を失ったらあか
ん》

《その人の人間性をすべて受
け入れる。人を信じるとはそ
ういうことや 中途半端は何
も生まんぜよ》

こんな言葉が彩る本書。「人
間、社会で生きる限り、誰し
も悩みはあるのですが、なん
とか気持ちを切り替えてほし
い」という思いで執筆にかか
ったという。

**わしのファッションは流
されない生き方そのもの**

老人の金言を拾い読みして
いくうちに、最初からきちん
と読んでいこうと、考えが変
わる。なぜかといえば、本書
の中で主人公である悩める青
年に教えるのがカゲーキフの
語る人生が、著者の半生に重
なるからだ。

本書の物語が進む中で、カ
ゲーキフは、学生時代に今で
いう、うつになり、大学を
出たものの、納得いく就職先
に出合えず、20以上の職を
転々とする。そんな20、30代
を経て、作家を志してから7
年目で新人賞を受賞。直木賞

を受賞したのは40才のときと
いう経歴が明らかになる。そ
れは著者の経歴そのものだ。
やがて、売れっ子作家にな
った彼は、過激なファッション
でも注目を集めるが、その
転機は、たまたまニューヨーク
帰りの女性が、カラフルな
タイツをおみやげにくれたこ
とからだった。

「これは女がはくもんじゃん
男がはいてどないするのよ」
と無視しかけるが、それを身
に着けて派手なTシャツを着
ると、心が解放された。そこ
ろが、街へ出ると、侮蔑と罵
声の嵐だった。

でも、そのファッションを
貫き、《わしのファッション
は 流されない生き方そのもの
の まわりに誇れるもんやな
くてな 心が着てるからつら
ぬける》と本書で明かす。

著者は、もうひとつのライ
フワークともいうべき、子供
たちへの本の読み聞かせを98
年から行っているが、その経
験が著書の子育ての話など
も生きている。

「もともと、全国各地の書
店へサイン会に行ったことが
きっかけです。サイン会をや
っている、野次馬が集まっ
てきますが、その中には子供
もたくさんいる。そこで読み
聞かせを思いついたんです。
もつとさかのほれば、ぼく
自身が母親に絵本を読んでも



人生は、もっと簡単にうまいく
カゲーキフの61の教え

宝島社 1365円

ささやかなミスから転職、自信をなくし、落ち込んでいる26才の青年・小脇谷竜馬がある日出会ったのは、仙人のような、妖術使いのような、時空を超えて生きているカゲーキフ。竜馬以外の人間には姿が見えないカゲーキフだが、みずからの体験を語りつつ、竜馬を励まし、恋の手ほどきまでしながら、生きること、愛することを説いていく。土佐弁、関西弁はもとより各地の方言が交じる文章に、なんともいえない親しみがわく。

朝井リョウくんの感性には興味を持っています

美しい物語の中に残酷な場面もある。それでも昔から読み継がれてきた物語、優れた



朝ドラ

視聴者の反応で脚本は変わっていく。はな朝はヒロイン・斉藤由貴の母親役・樹木希林の人氣に火がついたため、女性初の新聞記者という職業物語から母娘物語へと方向転換。

Twitterフォロワー数25万人の

ぼくは時代を 新しい世代だと

本は、豊かな情操を養ってく
れる。そう確信した著者は、
'99年夏から「よい子に読み聞
かせ隊」を結成して、保育園
や幼稚園、小学校を回ってい
る。これは夫妻一緒のプログ
ェクトだ。震災などの被災者
や、身体障がい者の集まりや
施設には完全なボランティア
として訪問している。

「10年単位で子供たちを見て
いると、始めたころは、廊下
で取っ組み合いのけんかをす
る子供をよく見ました。読み
聞かせが始まると、そんな子
供たちも静かに物語の世界に
入ってくるんですけれどね。最
近は、自分をはつきり出さな
くなっているのかな、けんか
も見かけなくなりました。嫌

な思いをしたくないでしょ
うね。

決して、けんかをすすめて
いるわけではないのですが、
時代の傾向なんでしょうか」
これもまた閉塞状況を物語
る一例かもしれない。

でも、ゆとり世代といわれ
る現在15才から25才の人たち
の将来に、著者は期待する。
「今の閉塞状況を崩していく
のは、ゆとり世代の持つ創意
工夫。彼らの創造性には期待

していいと思うんです。現に
直木賞を受賞した朝井リョウ
くんの感性には興味を持って
います」

最近の新人社員を飲み会に
誘うと、「その日は母の誕生
日ですから、行きません」と
断る。それに対して、上司は
「社内コミュニケーション
も築けないのか」と怒るとい
うが、著者は「母の誕生日の
ほうが大切」という若者のほ
うが、正しいという。

「こうした例は典型的な価値
観のギャップでしょうが、ほ
くは時代をつくっていくのは
新しい世代だと期待していま
す。ろくでもない大人たちの
時代を、ゆとり世代の新しい
感覚で変えていってほしいで
すね」

インタビューの終わりに、
著者の事務所ほど近い都心
の公園で写真撮影。子供に交
じってブランコをこぐ著者は
神話や民話に出てくる妖精み
たい。まさに本書の中で自在
に動き回るカゲーキフそのも
のだった。

しもだ・かげき
1940年、静岡県生まれ。中央大学
法学部卒業。'76年作家デビュー。
'80年「黄色い牙」で直木賞を受賞。
'99年から「よい子に読み聞かせ
隊」を結成。読み聞かせて全国を
行脚する。現在はTwitterでの
人生相談が10代の若者を中心に人
気を集めており、フォロワーは25
万人を数える。

志茂田景樹さん⁷³